

下の典藥寮の長官（典藥頭）あるいは皇后宮職隸下の施藥院の長官（施藥院司使）を「家職」にしていた。

しかし「家格」の点では、両氏の間には若干の差があった。丹波氏の極位が正四位下だったと思われるとき、和氣氏が正五位上より上位に立ったものは無かったのである。

今回の報告では、いわゆる和丹両流の形成の情況と以降の様子、それぞれの「家職」と「家格」、および兼職の情況などについて、若干のことを述べたいと思う。

（日本医科大学）

## 7 半井本『医心方』の病名仮名訓

岩井 佑泉

半井本『医心方』の仮名注、すなわちカタカナによる小字傍注を書いたのは、巻八巻首の識語の中に「初下點行盛朝臣朱星點墨假字 重加點重基朝臣朱星點假字勸物」：とあることから行盛朝臣と重基朝臣の二人であることが知られる。行盛は文章博士・藤原行盛で『金葉和歌集』（大治二年／一一二七年）に二首の歌が入選している。重基は権医博士・丹波重基で大治五年（一一三〇年）に関白の治療をした記録があるという。（杉立義一『医心方』半井家本の一考察「京都大学人文科学研究所研究報告」中国古代科学史論」別刷。一九八九年三月、六九七頁）

仮名注は字音注と和訓注があるが、和訓注の中から病名に付せられたものをいくつか拾って検討したい。検討

資料は仮名注成立に約二百年先行する源順の『倭名類聚抄』（九三四年頃）を中心とし、狩谷望之『箋注倭名類聚抄』（文政十年／一八二七年成立・明治十六年／一八八三年刊）、大槻文彦『言海』（明治二十四年／一八九一年）等を参考とする。

|         |      |               |               |
|---------|------|---------------|---------------|
| 『医心方』巻数 | 漢語病名 | 『医心方』仮名訓      | 『倭名類聚抄』       |
| ①巻三     | 失音   | コエラウシナへル／コロロク | 失聲・比古恵 古路々久   |
| ②巻五     | 耳聾   | ミミシイ／ミミキカス    | 聾・美々之比        |
| ③       | 聾耳   | ミミタリ          | 聾耳・美々太利       |
| ④       | 耳打聾  | ミミクソ          | 聾・美々久曾        |
| ⑤       | 目清盲  | アキシヒ          | 阿岐之比          |
| ⑥       | 雀盲   | トリメ           | 度利女           |
| ⑦       | 重舌   | コシタ           | 下総本のみ「俗云古之太」  |
| ⑧巻七     | 陰類   | ソヒ            | 會比            |
| ⑨       | 脱肛   | シリイツルヤマヒ      | 脱症・之利以豆流夜萬比   |
| ⑩巻八     | 轉筋   | コムラカヘリ        | 古無良加倍利／加良須奈倍利 |

|     |    |           |           |
|-----|----|-----------|-----------|
| ⑪巻九 | 欬嗽 | シハフキ      | 之波不岐      |
| ⑫   | 喘息 | アヘキ       | 阿倍岐       |
| ⑬   | 噦  | サクリ       | 噦噎・佐久利    |
| ⑭巻十 | 疔  | アタハラ／シラタミ | 阿太波良／之良太美 |
| ⑮   | 瘡  | エカハラ      | 衣賀波良      |
| ⑯   | 癩瘰 | カメハラ      | 加女波良      |

右のように『医心方』の仮名訓はその多くが『倭名類聚抄』の万葉仮名による和訓と一致が見られる。『倭名類聚抄』巻三病類第四十を中心とする百余りの病名はそのほとんどが『諸病源候論』から、残りは『説文』、『玉篇』、『唐韻』などから取られたものである。①のコロロクは狩谷望之は注で「喉が鳴るのをコロロクというので訓として誤りである」と指摘している。これは『言海』の「ころろく 喉カワキテ、コロコト鳴ル」という記述からも確認され、『医心方』の病名仮名訓は『倭名類聚抄』の記述を誤りもともに踏襲した可能性があると見えよう。

(埼玉県浦和市)